Ⅴ　本邦企業団体の活動事例

会社名		進出先	内容
①	企業Ａ社	ロシア、中央アジア（カザフスタン、ウズベキスタン、キルギス）	酪農用農業機械（ヘーベーラ、小型ロールベーラ等）
②	自治体Ｂ、Ｃ、企業Ｄ社	ロシア･サハリン州ユジノサハリンスク市（予定）	レタス・キュウリなどの生野菜（農業パーク構想）
③	企業Ｅ社	ロシア・沿海地方	かぼちゃ
④	企業Ｆ社	タジキスタン、アゼルバイジャン、カザフスタン、ロシア	甘草
⑤	農業生産法人Ｇ	ロシア･サハリン州ユジノサハリンスク市	マンゴーの温室ハウス栽培、 あか毛和牛飼育
⑥	企業Ｈ社	カザフスタン	物流
⑦	企業Ｉ社	カザフスタン	麦類、油糧作物、野菜等の多品目生産に対する生産管理･保管･販売過程の改善協力
⑧	自治体Ｊ	ロシア・沿海地方	農業技術協力
⑨	企業Ｋ社	ロシア・ハバロフスク市	植物工場
⑩	団体Ｌ	キルギス	野菜種子
⑪	企業M社	ロシア･アムール州ブラゴヴェシチェンスク近郊･ウラジミール農場（モデル農場）	ソバ・大豆等
⑫	企業Ｏ社	ロシア・ハバロフスク州	植物工場
⑬	企業Ｐ社	ロシア、カザフスタン ※現時点は実施しておらず	小麦
⑭	企業Ｑ社	ロシア・CIS	小麦輸送 ※カザフ買付－ロシア経由－モンゴル輸送
⑮	大学Ｒ	ウズベキスタン	

（1）進出理由

ロシア極東およびＮＩＳ諸国への進出理由は以下のとおりにまとめられる。総じて、日本の最先端技術や農産物の安全・安心面から日本企業の進出が期待されている。

①ロシア極東

○農産物栽培や事業展開における適正
・ロシアの場合は潜在資源が豊富。
・内陸性気候で年間最高気温が 30 度を超えるなど肥沃で耕作に適した土地を有す。
・寒冷地であるロシア連邦のシベリア極東両地域においては葉菜類の露地栽培が困難な季節があることから、両社共同事業による植物工場でレタスなどの葉菜類の生産が季節を問わず年間を通じて安定して行われる。
・沿海地方政府は農業生産を 2 倍に高めたいとの考えがあり、日本の先進技術によるオーガニックな農産物の生産や畜産などに技術協力を求めている。

○新鮮で安全な農産物への期待
・ロシア極東地域では、中国・韓国からの粗悪・劣悪な食材輸入に依存している状況。
・新鮮で安全な野菜を求める人々が増えており、温室栽培事業が復活しつつあることから植物工場設置を検討。
・植物工場による葉菜類の生産は、外気をシャットアウトし、農薬も使用しないことから非常に安全性の高い特徴がある。

○その他
・ユジノサハリンスク市には現在公設卸売市場がなく、物流効率化が課題となっている。
・日本側の自治体にとっては人口減少や農業の先行き不透明感等から、ロシア極東との経済交流により海外展開や物流活性化が期待できる。
・自治体と極東ロシアの連携を再び深め、経済交流強化や県の拠点性向上につなげたいとの考えに基づく。
・小麦のサプライヤーとして、カナダ、アメリカ、オーストラリアの代替として注目。
・新興国の経済発展により拡大する物流需要にともない新興国における物流ネットワークの構築を進めている。

②NIS諸国

○栽培条件・事業展開の適合性
・カザフスタンは日本の農地面積の約５倍に相当する黒土の肥沃な穀倉地帯を持つ一方、栽培・生産管理等の技術不足による生産性の低さが指摘されるところであり、改善による生産性向上への期待がある。
・ウズベキスタンについては大規模な農業人口、カザフスタンについては経済力に着目。
・中央アジア・ロシアが原材料の主要な生産地であることから調達先として進出。
・従来より自然・気候条件により中央アジアは採種事業に適した地域とされていた。
・トルクメニスタンについては注力しており現地事務所を設立、天然ガスの加工工場あり。

○その他

・中央アジアおよびロシアにおいて多国での展開を行っているが主な理由はリスク回避にある。1ヵ所に大きな工場を設置するよりも小ぶりな工場をいくつかの国々で展開することで対応している。

・物流企業としては後発のため大手との競合を避けるべく中央アジアに進出。中継物流およびロシアや中国に挟まれている地理的優位性からカザフスタンに進出。

・タジキスタンについては中央アジアのうち最貧国であり支援の意味もある。少しでも現地に外貨を落とせる点を勘案している。

・カザフスタンの食糧供給の安定化への貢献。

（2）課題

ロシア極東およびＮＩＳ諸国への進出において最も課題とされるのは輸送コストが指摘されている。輸送距離の問題あるいは煩雑な手続きがＮＩＳ諸国からの農産物の輸出入においてネックとなる。
また農業分野は、現地の土壌や気候、農業インフラ等の栽培条件の違いがあり特殊な事業であることから現地の事情に詳しいカウンターパートが必要となってくるが、最適なパートナー探しが難しい。
その他、ロシア極東やＮＩＳ諸国の事情による事業計画の遅れやインフラの未整備などが事業推進の妨げとなっている点も挙げられる。

①ロシア極東

○輸送コストおよび輸送手続、その他手続き上の課題

・小麦のサプライヤーとして、カナダ等の代替として注目していたが、結局課題がクリアできずロシアは Too early というのが結論。課題は、①インフラ面：極東の穀物ターミナルの不備、②鉄道距離が長いため運賃が高い、③輸出禁止や関税引き上げなど穀物統制。

・税関手続きが遅く手続き等が煩雑。ロシアの法律・ルールには、複数の解釈余地や選択肢が存在しているため、定型的に一律の理解・評価ができない。

・現場でのその時々による相対での個別交渉を避けて通れず、現地パートナー企業の力量と日系企業の対応力が問われる。

・ロシアでの植物工場の展開には①規格取得の必要と②ガス暖の適切性の確認が必要。

○栽培技術の課題

・栽培技術・農業技術・施設設計技術や市場の運営経験等がなく、技術面・運用面で日本側からの全面的なバックアップが必要。

・概ね各社・団体とも農業製品の試験栽培の段階であり、本格的な栽培・生産、大幅な輸送量拡大に発展するまでには相応の時間を要すると思われる。

・農業用地、土壌成分、温室経営、畜産用地など、生産・飼育において必要となる農業インフラの確認。

・農業は特殊な事業であり、その土地に根差した専門家やコンサルタントが必要。パートナーを見つけるのが難しい。

○事業計画着工における課題

・事業計画がないため、着工時期、事業費等の詳細が決まらず、事業推進において大幅な遅れが生じる。

・機械化の著しい遅れや道路・汚水管理などインフラの未整備。
・植物工場の採算性はエネルギーコストの安さにあり、コスト抑制。

○その他
・ロシアとの交渉・契約には時間を要するが継続維持していくことが重要。
・極東地域での市場展開の規模は現時点では小さいがニッチで潜在可能性のある市場。
・高級果物であるマンゴーの価格の市場への適性（富裕層を的に販促予定)。
・広大な土地の経営が成り立つか、農産物の流通ルートや市場価格、農地の耕作権など、農業経営を見据えた本格調査の実施。
・マーケットが小さいことが懸念材料。
・消費者側の意識として多少価格が高くても安全性を重視する傾向にあるかどうか。
・日露会談の際にロシア側政府と農業協力に関する覚書の締結に基づき、北海道の農業技術の伝承と農業関係資機材を扱う企業の現地進出を促す。
・ロシア農業に係る整った統計数値が見当たらないため農業事情の把握等の分析が困難。
・天候不順・洪水等の自然要因による収量への影響。期待収量に比べて半分程度の収穫。
・植物工場の設置に要する費用が高価格であるため、事業実施に向けた調整が難航。

②NIS諸国

○輸送経路のリスクおよび輸送コスト
・中央アジア進出においての課題は、物流コストと進出初期段階における相手側政府筋のカウンターパートの選択・決定。
・輸送経路におけるリスク（天津→阿拉山口；イラン東南部バンダーアバス港；トルコ経由)、輸送コストは課題。
・日本から中央アジアへ輸送する場合、メインは中国経由。ロシア側の価格動向を見ており動きも早い。一方ロシアは非常に対応が遅く税関によって異なる。
・但し壊れやすいものや中国で採れるもの（チタニウムなど）については遅延するリスクがあるためシベリアルートでの輸送が望ましい。
・カザフスタンまでの輸送はよいが、それ以降だと盗難リスクが高まる。またコンテナに入らない貨物はダメージを受けやすく、盗難に遭う可能性が高い。
・シベリアルートを担うロシア鉄道は従前に比べ2.5-3倍の運賃値上げが続いており、輸送費が高く海上ルートに劣後する。
・カザフスタンについては出口（港）を持っていないというインフラの問題がある。

○インフラの未整備、人材不足・技術不足
・タジキスタンにおいては送電事情が悪いため自前のジェネレーターを設置し対応。
・キルギスの野菜栽培に携わっている人材は現時点ではレベルが低い段階のため、野菜生産技術を指導できる試験場OBや営農普及員の派遣が必要。

○その他
・中国国内のメーカー増による同様事業の海外展開（中央アジア進出）の影響。

・物流、通関、衛生管理の手続きなどの面における課題の多さ。
・ロットがまとまらず混載便がないのが課題。共積みにより、一荷主の不備による遅れがコンテナに混載された他の企業に及ぶリスクもある。
・カザフスタンでの成功事例がまだ少なく、本邦企業は商社を除き進出に消極的。
・生産が麦類に偏重しており不安定な収穫高が課題。生産品の多様化に取り組む。

（3）今後の方向性

ロシア極東については今般のロシア情勢を踏まえ動きが慎重になる方向にはあるが、潜在可能性も考慮しながら今後の活動を考える方向にある。ＮＩＳ諸国は、現在の進出先としては概ねカザフスタンへの進出がみられるが、現状と課題を踏まえ、今後の方向性の検討が行われる。

①ロシア

〇肯定的見解
・ロシアへの経済制裁・欧州からの輸入減少により、アジアから極東への農産物需要が高まる可能性がある。
・日系商社のアグリビジネス展開先として、日本から地理的に近く、広大な農地面積を有するロシア極東エリアは有望なフィールドとなりつつある。
・日本はロシアからこれらの土地を賃借し、農業生産を行うことができる。
・日本政府はさまざまな技術指導者をロシアに送り、ロシアが自力でこれらの土地を開拓することができる。
・ガス産業の育成という観点からも植物工場の展開は推進される。
・試験栽培を踏まえて、ソバ・大豆以外の需要品目（ジャガイモ、ニンジン、タマネギ等）の安定的栽培を目指す。
・将来的には現地法人との合弁会社を設立し、栽培された農産物のロシア国内での販売、飼料作物としての道内への輸出、現地進出企業の金融面支援を目指す。

〇否定的見解
・ロシア農業を研究はしたがポテンシャルはあるがサステナビリティがなくまだ準備段階。
・ボリュームメリットがないとビジネスにならないため、そばなどは対象外。

②NIS諸国

〇肯定的見解
・カザフスタン、ウズベキスタン、キルギス等、中央アジア諸国への横展開を検討。中央アジアにおける販売拠点の選定を行う。
・将来的な海外展開を見据え、優秀なエンジニアの確保。
・安定的な原材料の供給。現地において原料栽培の新たな取り組みを推進。実験栽培を実施中。
・カザフスタンにおいて、大規模な農業生産および法人経営ノウハウを蓄積し、大規模農業事業ニーズへ対応。
・将来大規模生産で小麦などの輸出競争力が高まれば中央アジア向け輸出も検討、地域の食糧安定供給へ貢献。

・種子メーカーからは、中央アジアは種子生産地域としては手つかずの土地であり、今後、採種事業の対象地域として関心度が高い。
・中央アジアは従来はネットワークがないが今後の検討先として留意している。
・トルクメニスタンについては可能性がないか検討には値するかと思われる。
・シベリア鉄道を使った既存のルートからチャイナランドブリッジへの貨物シフト、カザフスタン等中央アジアへの本邦企業のさらなる進出による物流活性化が待たれる。

〇否定的見解
・大麦小麦については、ロシアでの展開の可能性がなくなったことで、カザフスタンでの実施可能性も現時点では低い。
・商社は1年2年の単位で予算クリアしないとダメであり、そもそも年数を要するアグリビジネスは向いていない。NIS はわかりにくい地域のため（農業は）手掛けない方針。
・植物工場の設置には費用がかかることから ODA 対象国での展開は困難と考えられ、NIS 諸国においても ODA 卒業国のような有望な国でないと難しいかと思われる。

〇その他
・ユーラシアはベトナムなどアジアとの FTA を進めており、ユーロ圏とロシアは深い関係にある。グローバル化に伴い、ユーラシア以外の地域も含めた世界全体でみる視点が必要。